

「言葉への意識」を高める 指導の工夫

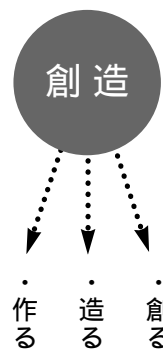
六年上「森へ」の指導を通して

新しい学習指導を考える会

どの学年でも、四月最初の教材での「国語ひらき」はその一年の国語学習の運命を決定するといっても過言ではないだろう。限られた時間の中で一人ひとりが何を学び取っていくのかを、すべての児童にしっかりとつかみ取らせることが求められる。

一 本のタイトルを生かして行う「言葉」の意識化
六年生上巻には『創造』という名が付けられている。この『創造』という言葉を取り上げたい。

まず、三つの言葉の違いやイメージを話し合わせる。次に、なぜここには「創る」と「造る」が使われている



三 重ねて読む

「森へ」は、筆者である星野道夫さんの視点で書かれ、カヤックに乗って海から森に足を踏み入れ、奥へ奥へと歩みを進めていく展開になっている。読み手である子どもたちも星野さんとともにどんどん森の中に入り込み、次から次へと繰り広げられる森の物語に胸がわくわくしてたまらない様子がうかがえる。そんなときは、無理に場面に分けたりせず、筆者とともに森の探検を繰り返させたいと思う。

(1) 登場する生き物を追いかけて

まず、子どもたちを引きつけるのは、多くの生き物たちである。そこで、登場してくる生き物を追いかけてながらこの作品の展開を追いかけてみたい。

ハクトウワシ・サケ（一びき）・ザトウクジラ・アカリス・サケ（大群）・クロクマなど、次々に生き物の名前が出てくるたびに、子どもたちの目が生き生きと輝き、遠くに思いをはせるかのようなまなざしを見せる。

さらにこれらの動物を追いかけているうちに、「先生、森とかキノコも生き物だと思う。」という声が上がります。森・巨木・樹林・草のしげみ・木々・コケ・地衣類・大木・白いキノコなどに気づくことができ、それらが森を成立させている大切な要素であり、タイトルである「森」に直結する重要な言葉であることに気づいていく。

のかを問うと、

- ・ 自分の考えを創らなくてはならないこと
- ・ 文章から思い描いたことは、自分自身の思いである
- ・ 自分という人間を創っていくことが大切なのだ

などの考えが出され、最終的に、国語の学習は、言葉を使って、自分自身を創るのだと結論づけられる。ここまで考えさせられれば、まず第一段階クリアと言えるよ。

二 「森へ」との出会い

読むことの文章との出会いで大切にしたいのは、その作品に好きなところがあるかどうかである。そこで一人ひとりに、自分が気に入った表現の一節、自分の心に残った場面などを明確にさせる。さらに、

- ・ なぜそこが気に入ったのか
- ・ なぜその場面が心に残ったのか

についてそれぞれの考えを交流させ、同じ表現や場面をとらえていても、読み手一人ひとりの思いは違うのだということに気づかせる。そしてさらに、自分が心に描いた情景図などを描かせ、その絵を互いに見合いながら、同じ表現の受け取り方の違いを認識させたい。情景図にキャプションなどを付けさせると、言葉とのつながりがより意識されてよいよである。

(2) 表現に触れながら

学年初めての教材では、ぜひ視写をさせたい。書き写させながら、一つ一つの語句や言葉と言葉のつながりなどに関心を持たせていきたいのである。

ここでは、作品の冒頭部分の一段落を書き取る。そしてその一段落をしっかりと読み込み、わずかな音から静かさを読み取ったり、場面の明るさを読み取ったり、場面の色を読み取ったりするなかで、言葉の大切さに気づいていくのであるが、どの場面を取り上げてよいと思う。

四 筆者星野道夫さんのメッセージをつかむ

読みの教材を学び取らせるときに、六年生ならば、筆者に学ぶことは、ぜひ体験させたいことである。

筆者星野さんは、さりげなく森の道をたどりながら、森の不思議、森の息づかいを、「じつと見つめ、耳をすませば、森はさまざまな物語を聞かせてくれるようでした。ぼくの目には見えないけれど、森はゆっくりと動いているのです。」と表現し、そこにつながるたくさんの言葉を作品にちりばめている。それらの言葉を探ることに、さらなるこの教材の学習価値があるのだと考える。自分の見つけ出した言葉を媒体として、友達と話し合えたとき、子どもたちはその言葉を獲得した、伝え合える言葉を持った、といえるのではないだろうか。